

アイダホ州ボイジーにおけるハイアルディ 2015 にみるバスク祝祭空間のトランスナショナルリティ

石井久生

1. はじめに

移民は移住先においてエスニック集団構成員の結束を強化することで集団の維持に努めようとする。集団の結束強化と他集団との差異化のために利用されるのが、その集団が長い歴史のなかで育み維持してきた文化的アイコンである。それは、集団のエスニシティを象徴する言語、宗教、習俗、伝統芸能などに代表されるが、「祝祭」もそのひとつである。故地で受け継がれてきた、あるいは故地を想起させる祝祭は、他の文化的アイコンとともに、移住にまつわる集団の記憶と彼ら固有の文化を移民と他集団に想起させ、移住先における団結と差異化のための強力な装置として作用する (Smith 1998: 191)。

アメリカ合衆国 (以下、アメリカ) の住民のほとんどは、移民とその子孫により構成される。したがってエスニックな祝祭の種類も豊富である。アイルランド系のセントパトリックステー、スコットランド系のハイランドゲームズ、ドイツ系のオクトーバーフェストなど枚挙に遑がないが、ヨーロッパを起源とするエスニック集団の祝祭が目立つのは、ヨーロッパ系の住民がアメリカ社会において最近数百年間主流の地位にあったためであろう。

ただし、ヨーロッパ出身のすべてのエスニック集団が社会の主流であった訳ではない。例えば、19世紀後半から20世紀中頃にかけて主にアメリカ西部に移住したバスク人は主流派とはいえない。彼らはバスク人が経営しバスク人のみを顧客とするバスク・ホテルをベースにコミュニティを形成したため、当時のホスト社会との接点は希薄であった⁽¹⁾。また彼らの代名詞となった職業は「羊飼い」であったが、人と接触することなく単独で荒野を長期間移動し、蓄財後は故地に帰郷する者が多かったため、英語を習得する必要性もなかった。そのため、現地ホスト社会への同化は進まず、しばしば差別の対象になった⁽²⁾。

そのようなバスク人ではあるが、移民の一部はアメリカ西部に定住するようになった。現在、全米には約5万人のバスク系住民が在住する⁽³⁾。マイノリティーという範疇にくくられることの多いエスニック集団の中でも、彼らは数的には極端なマイノリティーであるが、同人会組織にみられる彼らの結束は強固である。彼らの同人会組織は「バスク・クラブ Basque Club」と呼ばれ、定住が進んだ1930年代頃からアメリカ西部各地に組織された。

バスク・クラブは当初その活動拠点としてバスク・ホテルやそれに併設されたレストランを活用していたが、1940年頃から同人会固有の建造物を所有するようになった。それが「バスク・センター Basque Center」である。その当時、バスク・センターはバスク系住民が集住するアメリカ西部諸都市に建設された。そこに集うバスク系住民は、同族組織の連帯を強化するための諸活動を展開したが、祝祭もそのひとつであった。

エスニック集団が主催する祝祭を扱った研究は、アメリカにおいてエスニック・スタディーズが盛んになった1970年代頃から登場するようになった。その当時は、祝祭の象徴的意義に言及した象徴的エスニシティ研究や、当時注目され始めた多文化主義的研究が主流であった。例えば Gans (1979) は、アメリカの移民第二・第三世代の間で組織への帰属意識が希薄化するのに対し、エスニックな祝祭などを例示しながら、彼らがエスニシティの象徴を尊重することでアイデンティティの維持を図るようになる」と指摘し、象徴的エスニシティ論を展開している。同様に Van Esterik (1982) は、アメリカ中西部のエスニック・フードの祝祭を分析し、祝祭が地域社会においてエスニック集団間の相互理解を醸成するための装置として機能しているとしたうえで、多文化社会において変容しつつ創出される新しいエスニシティを強調している。

これら初期の研究は、エスニック集団とアメリカ社会との関係の検証に重点を置いていることに特徴がある。しかし、1990年代以降進展したディアスポラ研究、2000年代以降のトランスナショナリズム論は、移住先と出身地との関係の再確認を促した。Amin (2004) は、昨今の地域主義政策に焦点を当て、トランスナショナルなフローの増大やグローバリズムにより、従来の空間概念に根差した手続きや制度が成立しなくなりつつあり、旧来の地域を交差する多様で差異化された地理と連動する場所のポリティクスが重要であるとしている。そのような考え方からすれば、エスニックな祝祭をグローバルなレベルにおいて故地とディアスポラとの関係や連帯から検証することが重要になる。その具体例として Szymańska-Matusiewicz (2015) は、ポーランド在住のベトナム系住民が催す旧正月の祝祭を取り上げ、それに関与する組織としてベトナム人協会のような地元組織に加え、ベトナム政府に代表される故地の組織の存在を指摘している。そのうえで、移民の故地が進めるディアスポラ政策が移住先の祝祭をはじめとするコミュニティの諸活動に影響を与えているとしている。また、近年ますます活発化するヒト、モノ、情報のグローバルな移動により注目を集めるモビリティ・スタディーズとの連携も無視できない。その一例として McClinchey and Carmichael (2014) は、多民族化が進む現在のポストモダン都市では、住民のアイデンティティがますます流動化し、生活上の移動量も増大するにしたがい、単純さへの欲求、正統性の探求が助長され、エスニシティを強調したローカルな祝祭への参加が増えてくるとしている。

そうであるなら、昨今のエスニックな祝祭の隆盛はグローバル化の帰結なのであろうか。あるいはグローバル化に並行したモビリティの活性化という今日的現象の範疇で解釈可能な

のであろうか。そこで本研究では、こうした疑問を念頭に置きつつ、一連の研究の流れにバスクの祝祭を位置付け、バスクの祝祭空間のトランスナショナリティを検証することを試みる。

バスクの祝祭はアメリカ西部各地で開催されるが、本論では2015年7月末から8月初めにかけてアイダホ州の州都ボイジー市において開催されたハイアルディ 2015 (Jaialdi 2015) の検証に重点を置く。「ハイアルディ jaialdi」とは「祝祭」を意味するバスク語である。アメリカ西部各地で開催されるバスクの祝祭は「バスク・フェスティバル」と称されるが、ボイジーの祝祭にはバスク語の「ハイアルディ」がそのまま充てられている。ボイジーのハイアルディは、1987年が初回で、1990年以降5年ごとに開催されている。世界最大規模のバスクの祝祭と評されており、アメリカ国内はもとより南北アメリカ大陸のバスク・ディアスポラから、さらには故地のバスク地方からも多くの参加者や観客が訪れる。したがって、エスニック集団の故地とディアスポラの間を多角的に観察するには最適の研究対象である。

2. アメリカ西部におけるバスク系住民の祝祭空間

アメリカ西部在住のバスク系住民は、バスク・ダンス教室やバスク語教室などに代表されるエスニック・コミュニティの維持や活性化のための諸活動を積極的に展開しているが、それらの活動は20世紀後半といった比較的最近に始められたものである。その点、彼らが行う祝祭の歴史は古い。現在、バスク系住民が主催する祝祭行事は、「ピクニック」と「バスク・フェスティバル」の2つに大別できる。

ピクニックは、屋外でバスク風の食事会、ダンス、スポーツ競技などに興じるものであるが、バスク人が移住するようになった初期のころから彼らの間で最もポピュラーな行事であったようである。19世紀末から20世紀初めにかけて定住が始まった頃に、彼らがどのような余暇的活動を展開したかについて、Douglass and Bilbao (1975) が詳しく報告している。それによれば、19世紀後半のカリフォルニア南部では、成功を収め土地所有者となったバスク系の牧場経営者がスポンサーとなり、ピクニックに代表されるコミュニティの余暇的行事が開催されるようになったとされる。バスク系の牧場経営者が、牧場で就労するバスク系移民や定住したバスク系住民の家族を連れ立ち、大規模なバーベキュー・パーティーを頻繁に開催し、素手でボールを壁打ちするバスク独特の球技ピロタ pilota に興じる様子が報告されている (Douglass and Bilbao 1975: 387-8)。

当時彼らが主催した余暇的行事は、地元カレンダーに記載されるようなローカル社会にオープンな性格のものではなく、バスク系コミュニティの構成員みが参加する内向的な性格のものであった。当時の彼らの内的指向について Douglass and Bilbao (1975: 388) は、ローカル社会に流布していたバスク人に対する蔑視観に彼らが反応した結果としている。前述のように、バスク・ホテルを生活拠点として日頃から閉鎖的コミュニティのなかで生活する彼ら

は、ローカルホスト社会との接点をほとんど持たず、主に羊飼いとして長期間単独で荒野を移動するため英語を習得せず、ローカルホスト社会にとっては蔑視の対象であった。また羊飼いが遊牧の際に通過する牧場などの土地所有者らとの摩擦も、差別の原因となった。こうした状況下で、ピクニックなどの彼らの閉鎖的コミュニティ活動は、彼らにとって一種避難所的機能を果たしていた。

しかし状況は 20 世紀半ば頃、バスク系羊飼いが急減したことにより大きく変化した。当時のバスク系羊飼いの減少は、移民制限や土地管理によるところが大きい。1921 年と 1924 年の移民法が出身国別割当制を導入したことで、不利な条件となったバスク地方からの移民が急減した⁽⁴⁾。牧場主と牧羊業者との対立の結果 1934 年に制定された「テラー放牧法 Taylor Grazing Act」は、国有放牧地内に設定した 8000 万エーカーの放牧地区 grazing district を利用するにあたり連邦政府の放牧許可を要求したため、バスク系羊飼いが確立した長距離移牧ルートを大幅に縮小することになり、羊飼いの減少に拍車をかけた。しかし、第二次大戦期の徴兵と、毛織物の需要増加により、1940 年代には羊飼いの不足が深刻化した。これに対してアメリカ合衆国西部諸州は、通称「羊飼い法 Shepherd Laws」と呼ばれる一連の法律を適用し、羊飼いを特殊技能者として確保したが、それにより最も恩恵を受けたのがバスク人であった。これによりバスク地方からアメリカ西部への移民の波が復活し、新しく到着した移民の多くは再び羊飼いに従業した。バスク人に対するイメージが変化したのはちょうどこの当時であり、バスク人羊飼いを浪漫的あるいは英雄的人物像として描いた文学作品が現地の作家らにより発表されるようになった (Douglass and Bilbao 1975: 388)。

これと時期をほぼ同じくして、バスク・フェスティバルが開催されるようになった。その最初が 1959 年にネヴァダ州リノの近郊スパークスで開催されたナショナル・バスク・フェスティバルであった (Douglass 1996: 191, Zubiri 2006: 305)。そのスポンサーは、アイダホ生まれのビスカヤ系バスク人と結婚したカジノ経営の地元住民であった。この祭典は、一般に公開されという点で従来の彼らの祝祭行事と性格が大きく異なる。この祭典では、スペインとフランスの両大使が招待され、バスクの伝統的スポーツである丸太切り競争 Aizkolaritza や石のリフティング Harri jasotzea, 牧羊犬競技会が開催され、バスクの伝統的料理が提供された。2 日間の祭典期間に、アメリカ西部のバスク系住民をはじめ地元住民を含めた 5~6 千人が参加したとされる (Douglass 1996: 191)。

ナショナル・バスク・フェスティバルは、アメリカ西部のバスク人が集結した最初で最大級の祝祭となった。同時に、1960 年代にアメリカ西部各地のバスク・ディアスポラにおいて今回の様式をモデルとしたバスク・フェスティバルが開催されるようになる契機となった。各地のバスク・フェスティバル実施母体となったのは、同人会組織であるバスク・クラブであった。現在アメリカには約 50 のバスク・クラブが存在するが、その創設に関わったのは主にアメリカ生まれの世代であり、最初の登場は 20 世紀に入ってからであった。最初の同人会組織は、アメリカ東部ニューヨークで 1905 年設立されたバスク・アメリカ人センター

Centro Vasco-Americano であった (Totoricaguena 2005: 223)。アメリカ西部で最初に創設されたのは、1914年のユタ州オグデンのバスク・クラブであった (Zubiri 2006: 473)。ただし、アメリカ西部で初期に創設されたバスク・クラブは、フランス系とスペイン系の対立など不安定要素が多く、解体と組織化を繰り返していたとされる (Douglass and Williams 1975: 384)。そのような中でも現在まで続くバスク・クラブが20世紀前半に創設されている。そのひとつで最古のものが1938年にカリフォルニア州カーン郡で設立されたバスク・クラブであるとされる。その後1949年には、アメリカ西部で最大のバスク系住民集住地であるアイダホ州ボイジーでもバスク・クラブ Euskaldunak が創設される。しかし、これらのように1950年代以前に組織化された例は少ない。むしろ1959年の第1回ナショナル・バスク・フェスティバルに引き続く1960年代以降に創設されたバスク・クラブがアメリカ西部では多数派である⁽⁵⁾。

各地のバスク系住民コミュニティの組織化と並行して、1960年代以降、春から夏にかけての週末に各地でバスク・フェスティバルが開催されるようになった。2015年にアメリカ国内で開催された祝祭を、バスク系住民コミュニティのニュースを扱う *Euskal Kazeta* のホームページに掲載された情報からまとめたのが図1である。それによれば、バスク・フェスティバルが13都市で、ピクニックが12都市で開催されている。ピクニックは基本的にはバスク系住民内で閉じた行事であり、コミュニティの連帯強化を主目的としている⁽⁶⁾。それに対し、バスク・フェスティバルは地域に開放された祝祭であり、その開催には一定規模以上のバスク系住民の存在が前提となる。そのためバスク・フェスティバルが開催される諸都市は、アメリカ西部でもバスク系住民の多いアイダホ州、カリフォルニア州、ネヴァダ州にほぼ限定される。

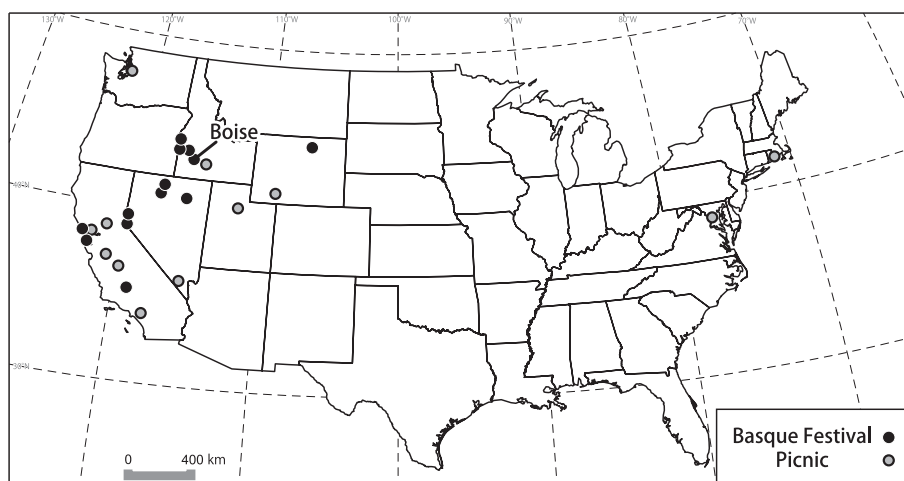


図1 アメリカにおけるバスク関連の祝祭 (2015年).

出典：石井 (2015b) を一部修正.

1960年代以降各地で開催されるようになったバスク・フェスティバルは、バスク系コミュニティの活性化に多方面で貢献した。最大の貢献は、バスク系コミュニティの存在をアメリカ社会に認知させたことにある。祝祭に登場するバスクの伝統衣装や伝統的スポーツが雑誌や新聞などのメディアに掲載されることで、彼らのエスニシティの視覚的イメージがアメリカ社会に浸透することになった。

同時に、各地のバスク系コミュニティの結束を強化したことはいうまでもないが、アメリカ西部各地に散在するコミュニティ間の結束を促したことは特筆すべきである。それ以前、各地に散在するコミュニティ間の交流の機会は限られていたが、バスク・フェスティバルが開催されるようになるとバスク系住民は各地で開催される行事に参加するようになり、舞踊グループやスポーツ選手などを相互に派遣するようになった。アメリカ西部のバスク・ディアスポラの一体化にバスク・フェスティバルが貢献した点は注目に値しよう⁽⁷⁾。

バスク・ディアスポラの一体化のひとつの到達点は、1973年のNABO（北米バスク協会：North American Basque Organization）の組織化であった。NABOは、1973年にネヴァダ州のリノに集合した複数のバスク・クラブの代表者らが、全米各地に散在するバスク・クラブを統括するために組織した各地のバスク・クラブの上位組織である⁽⁸⁾。NABO結成以降、アメリカのバスク系コミュニティの一体化はさら進行し、1980年代にはボイジーのハイアルディの開催として結実することになる。

3. ボイジーのバスク祝祭空間とハイアルディ 2015

アイダホ州ボイジーにおけるバスクの祝祭の歴史は、20世紀前半までさかのぼる。記録に残る大規模かつ最初の行事は、1928年のクリスマスにバスク系の牧羊企業家ジョン・アチャバル John Achabal が主催した舞踏会であろう。この舞踏会は、半年以上の遊牧の後の子羊が生まれる冬季に、バスク系羊飼いがボイジーのバスク・ホテルに滞在する時期に合わせ、彼らの慰労の意味を込めて企画されたものである。当初は厳しいドレスコードがあり、全員バスクの伝統衣装に身を包んで参加したとされる（Douglass and Bilbao 1975: 387-8）。この舞踏会は「羊飼いの舞踏会 Shepherders' Ball」と呼ばれていた。これと同時に開催される子羊のオークションや宝くじ販売の収益金は、ボイジーの慈善団体に寄付された。この当時はバスク人に対する社会の目がまだ厳しかった時代であり、それにもかかわらずローカル・ホスト社会とバスク系コミュニティとの交流が図られていたことは全米的にみても例外的であったといえる⁽⁹⁾。

バスク系コミュニティの典型的祝祭行事としてピクニックを先にあげたが、ボイジーでは1930年代前半には市内南部のモード・カントリークラブで盛大なピクニックが模様されていた⁽¹⁰⁾（Zubiri 2006: 368）。特筆すべきは、1933年のピクニックにバスク系以外のローカル・ホスト社会住民も多数招待されたことである（Yatsko 1997: 57）。その様子はボイジー

のバスク博物館所蔵の写真からも確認することができるが、これは地元住民がバスク系コミュニティ主催の祝祭に参加した最初の事例となろう。

1949年にボイジーではバスク・センターが開設されているが、それとほぼ同じ時期、故地ビスカヤの守護聖人であるイグナティウス・ロヨラの祝日に合わせ、7月最後の週末に同聖人を祝う祝祭がバスク・クラブ主催で開催されるようになった (Yatsko 1997: 57)。この祝祭は現在では聖イグナチオ祭 San Inazio Festival と呼ばれ、地元住民も参加する年中行事となっている。祝祭のスタイルは初期の頃から大きな変化はない。金曜夕方からのバスク・センターでの飲食会に始まり、土曜の午後はバスク・センター近辺で音楽や舞踊が披露される。その夕刻には地元のセントジョーンズ教会においてミサ Basque Mass が故地と同じスタイルで執り行われる。さらに最終日曜には近隣の公園でピクニックが開催され、同日夜のバスク・センター近辺での舞踏会で閉会となる。

1987年から開催されるようになるボイジーのハイアルディは、こうして構築されてきた地元住民との良好な関係がベースになっていることは言うまでもない。開催のきっかけは、1986年にソルトレイクシティで開催されたNABOの総会であった。総会に出席したボイジー出身のNABO会長エルキアガ Al Erquiaga が、同席した当時のバスク州政府文化大臣インチャウスティ Jokin Intxausti と会合後に交わした会話のなかで、祝祭開催のアイデアが話題に上った (Yatsko 1997)。その後エルキアガ会長は、ボイジーのバスク・クラブの評議会に祝祭開催を提案し、ハイアルディの開催が決定された。こうして1987年のハイアルディはボイジーのバスク・クラブ主催で開催された。開催当時は、1959年にネヴァダ州リノの近郊パークスで開催されたナショナル・バスク・フェスティバルのように一度限りの予定であったといわれる。しかし後に、アイダホ100周年委員会が州の100周年事業の一環として1990年にハイアルディを再び開催することをバスク・クラブに提案し、第2回ハイアルディが1990年に開催されることになった。2度のハイアルディがバスク系住民のみならず多くの市民に好評であったため、それ以降は5年ごとに開催されるようになった (Yatsko 1997: 59-60)。

今回開催されたハイアルディ2015は、初回から7度目の開催にあたる。ハイアルディ2015は、スケジュール(表1)に示したように複数の行事が複数の会場に分散され開催された。これらの行事から読み解くことのできるハイアルディ2015の本研究における意義は、以下のようにまとめることができる。

最大の特徴は、祝祭の地理的軸となる場所にバスク・ブロック Basque Block を位置付けている点である。バスク・ブロックとは、グローヴ通り600番台の1ブロックを示すが、各種のバスク関連施設が集中し、バスク地方以外ではバスクのエスニック景観が観察される世界で唯一のバスク人街である(図2参照)。ここは州庁舎や市役所から徒歩圏内というボイジーの業務地区に位置しながら、1949年にバスク・センターが創設された当時は、バスク・ホテルが集中するバスク人街であった(石井2015a)。1970年代頃からバスク地方からの移

表1 ハイアルディ 2015 にスケジュール

月日	時間	行事	会場
7/28	17:00-23:00 19:00-	Welcome to Boise Kepa Junkera: Live from Bilbao	Basque Block ①
7/29	17:00-23:00	Welcome to Boise	Basque Block ①
7/30	正午-深夜 20:45- 19:00-	Basque-ing on the Block Street Dance Sports Night	Basque Block ① Basque Block ① CenturyLink Arena ②
7/31	正午-深夜 19:00-	Basque-ing on the Block Festa'ra	Basque Block ① Morison Center ③
8/1	10:00-18:00 19:00-	Basque-ing at Expo Idaho San Inazio Mass	Expo Idaho ④ St. Mark's Church ⑤
8/2	11:00-17:00 20:00-	Basque-ing at Expo Idaho Street Dance	Expo Idaho ④ Basque Block ①

備考：各会場末尾の数字は図2中の数字に対応。

出典：公式パンフレット *Jaialdi 2015 Souvenir Book* 記載のプログラムによる。

民が急減し、このブロックにおけるバスクのプレゼンスは低下したが、1980年代半ば以降に市当局とバスク系住民との連携による再開発が進行した⁽¹¹⁾。その結果、現在ではバスク・センター、バスク博物館、飲食店などのバスク関連施設がブロック大半を占める⁽¹²⁾。また、建物壁面には巨大なバスクの壁画が、路面にはバスクの紋章が組み込まれ、ブロック全体でバスクのエスニック景観が演出されている⁽¹³⁾。バスク・ブロックは、バスク系住民にとって集団の経験した歴史に思いをはせる心象的な場所であり、それと同時にコミュニティ活動を展開する社会的な空間でもある。さらにバスク系以外の住民にとってはバスク系コミュニティの存在を強烈に認知するエスニックな空間である。エスニック集団が経験した歴史が複雑に交差するこの場所を軸に祝祭の空間がボイジー市内に展開することで、ハイアルディのエスニックかつナショナルな意味が強調されることになる。

ハイアルディ 2015 の行事は、バスク・ブロックを軸として図2に示したように市内各所で開催された。7月30日木曜にはバスク・ブロックに隣接するアイスホッケー場センチューリーリンク・アリーナ（図2中②）で石のリフティングや丸太切などの競技会 Basque Sports Night が開催され、バスク地方からの招待選手をはじめ、全米各地から多数の選手が参加した。7月31日金曜夜にはバスク州立大学内のモリソンセンター（図2中③）でバスク地方とボイジーから参加の演奏家と舞踊家による上演会 Festa'ra が行われた。8月1日土曜にボイジー市西郊に位置するセントジョーンズ教会（図2中④）で聖イグナチオのミサ San Inazio Mass が開催された。これは、1949年のバスク・センター開業頃から毎年7月最終週末にバスク・センターで開催されてきた聖イグナチオ祭を拡張したもので、ハイアルディの開催年のみ郊外のカトリック教会で特別なミサとして開催されているものである。8月1日と2日の土日には、西郊のエキスポ・アイダホ会場（図2中⑤）にて広大な会場を

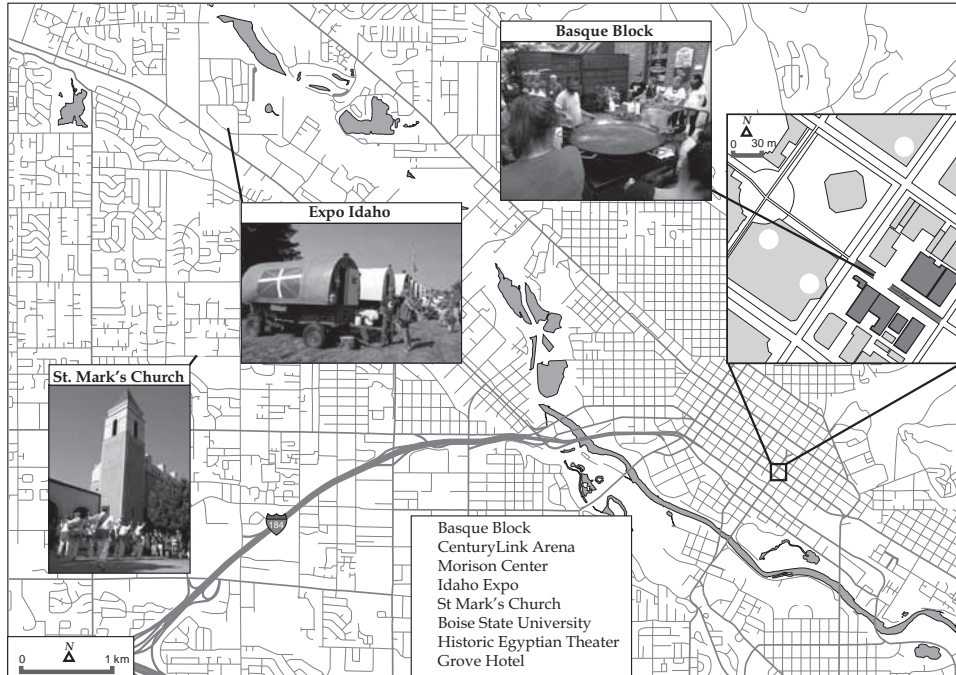


図2 ハイアルディ 2015 と関連行事のイベント別会場。

備考：拡大図中の濃色はバスク関連建造物を示す。

利用した大規模な祭典 Basque-ing が開催された。展示場屋内には各種販売ブースが開設され、屋内ステージではアメリカ西部各地から参加した舞踊グループがバスク・ダンスを披露した。さらに屋外展示スペースには、各種の飲食ブースが配置され、バスク系移民の歴史を偲ばせるシープ・ワゴンが多数展示された。このイベントは 1987 年と 1990 年はボイジー市北東部の州刑務所跡を会場としていたが、1995 年から現在の会場で開催されている⁽¹⁴⁾。

各会場で開催されるミサ、スポーツ競技、舞踊などは、バスク地方で開催される祝祭を構成する典型的要素である。そもそもバスク地方の祝祭は、各地の守護聖人を祝う行事から発生し、聖人のミサなどの宗教的行事を中心に構成される。核となる行事に付随するのが、食事会、舞踊、スポーツ競技大会などの余興的な行事であり、これらの総体で祝祭が構成される。ボイジーのハイアルディは、故地の祝祭の典型的スタイルを踏襲することで、エスニックな正統性をこの祝祭に与えることに努めているといえる。

正統性という観点からすれば、祝祭の様式の継承も重要になるが、2015 年開催のハイアルディの様式は初期の段階で確立されていた。1995 年のハイアルディを詳細に報告した Yatsko (1997) は、当時のスケジュールを掲載し、イベントごとに解説を加えている。それと比較すれば、2015 年段階で新しく加わった要素はほぼ無い。あえて違いを指摘するなら 1995 年当時はバスク・ブロックのストリート・イベントとして開催されていたスポーツ競技会が、2015 年には独立してアリーナで開催されている程度である。それ以外のミサ、

舞踊上演会、バスク・ブロックや大催事場でのイベントは1995年当時にはほぼ現在のスタイルで実施されている。こうしたことから、ハイアルディは初期の段階でバスク地方の祝祭の伝統的構成要素を取り込み、そうして演出されたエスニックな「伝統」を大きく変えることなく継承することで、祝祭にエスニックな正統性を付与してきたといえる。

4. 祝祭空間と越境するバスクのナショナルリティ

ハイアルディの祝祭を彩る各種行事もさることながら、並行して開催される関連行事も重要な意味を持つ。ハイアルディが開催される週は「バスク・ウィーク」とされ、市内各所でバスク関連のイベントが開催される(表2)。それらの中には、アメリカはもとより南北アメリカ大陸、ひいては世界各地のバスク・ディアスポラにとって重要な意味を持つ行事もある。そのひとつが、ハイアルディに先行して7月29日と30日の2日間にわたり開催されたバスク研究シンポジウム“Joan-Etorri”である⁽¹⁵⁾。このシンポジウムは、ボイジー州立大学(図2中⑥)において開催された。内容は、バスク研究に携わる研究者らによるパネルディスカッションやプレゼンテーションにより構成されるが、それを主催したのはボイジー州立大学内のバスク研究プログラムである⁽¹⁶⁾。このシンポジウムには、カリフォルニア州やネヴァダ州などの全米各地のバスク研究者をはじめ、バスク地方の大学に所属する研究者も参加した。いふなればこのシンポジウムは、世界各地のバスク研究者が一堂に会する機会として設定されているのである。

世界各地のバスク人が集結するという意味では、このシンポジウムの一環として7月29日夕刻からバスク・ブロックに近い劇場(図2中⑦)で開催されたバスク映画祭“Meet the Basques” Community Gatheringのタイトルは象徴的である。映画祭の具体的内容はアメリカやバスク地方など各地で作成されたバスクに関するドキュメンタリー映画の上映であったが、そのタイトルからわかるように、各地のバスク人を集結させるという意味がある。実際にハイアルディの時期には、アメリカ国内のみならず、南北アメリカ大陸のバスク・ディアスポラ、さらには故地のバスク地方からもバスク人がこの場所に終結する。したがってこの行事には、バスク人コミュニティの結束を地理的制約を超えて強化するという意味がある。

表2 ハイアルディ2015に並行してボイジーで開催される主なバスク関連行事

月日	時間	行事	会場
7/29	09:00-16:00	“Joan-Etorri” Basque Studies Symposium	Boise State Univ. ⑥
7/29	17:30-	“Meet the Basques” Community Gathering	Historic Egyptian Theater ⑦
7/30	09:00-16:00	“Joan-Etorri” Basque Studies Symposium	Boise State Univ. ⑥
7/31	08:00-	NABO Annual Convention	Grove Hotel ⑧

備考：各会場末尾の数字は図2中の数字に対応。

出典：Jaialdi Week Schedule 記載のプログラムによる。

ハイアルディ 2015 の期間中、越境するバスク人の連携を強化する試みが随所に仕掛けられていたといえる。ハイアルディ 2015 に合わせて NABO の年次総会がバスク・ブロックに隣接するグローヴ・ホテルで開催されたことは、そのような仕掛けの中でも最も意義深いものであろう。前述のように NABO は、全米各地に散らばるバスク・クラブを統括するための組織である。NABO は 1979 年以降年次総会を各地持ち回りで開催しているが、ハイアルディの開催年には年次総会会場がボイジーに設定されることが多い⁽¹⁷⁾。ハイアルディに合わせてボイジーで年次総会を開催することは、ボイジーに集結するバスク人に組織的な結束を認識させ、越境するバスク人コミュニティの連携強化を促す意味があるといえる。

ここまでの記述から、ハイアルディ 2015 はそれを目的にボイジーに集結するバスク人のエスニックな連帯を地理的制約を超越して強化する装置であると結論付けられそうであるが、はたしてその範疇に収まる現象なのであろうか。議論をさらに展開する鍵は、故地バスク地方からの参加者にある。Jaialdi 2015 主催者の推計によると、開催期間中の全参加者は約 3 万人であったとされる⁽¹⁸⁾。そのうちバスク地方からの参加者は、2 千人から 4 千人であった⁽¹⁹⁾。数値の幅が大きいものの、およそ 10 分の 1 はバスク地方からの参加者であったといえる。他のエスニック集団が主催する祝祭に故地からどの程度の数が参加するかを証明する具体的資料がみつからないので、10 分の 1 という割合の客観的意義を評価できないが、決して小さい数とはいえない。

バスク地方からの参加者の多くは個人的意思によるものであるが、首相を含めバスク州政府から参加した 20 名、スポーツ競技、舞踊、歌謡などのパフォーマーとして参加した約 100 名には、バスク州政府による公的支援として旅費が支払われている⁽²⁰⁾。この種の旅費はバスク州政府首相府直属の外務局の予算から支出されるが、同局は対外政策の中でもディアスポラ政策に力を入れている。特に 1994 年にバスク地方外のバスク・センターを組織化し支援するための州法 8 号が成立して以降、その傾向がさらに強まっている⁽²¹⁾。同法は、世界中のバスク・ディアスポラのネットワーク拠点として各地のバスク・センターを活用することで、世界各地に散在するバスク・ディアスポラの組織化とバスク人コミュニティの活性化を進めることを目的としている。一例をあげると、バスク州政府は NABO に対して現在年間 2~4 万ユーロの予算を同法を根拠に拠出している。NABO はその予算を全米各地のバスク・センターに配分している。さらに各地のバスク・センターは、バスク語教室やバスク・ダンス教室などの運営費に充当し、バスク系住民コミュニティの組織化と活性化に役立てている。

バスク州政府がバスク地方外のバスク・ディアスポラの組織化と活性化を進めるようになったのは、1979 年の自治州成立直後からである。その当時からバスク州政府は、ディアスポラ支援のためにバスク・センターの役割に注目していたとされる (Totoricaguena 2005: 195)。そして 1994 年の州法 8 号により世界各地に散在するバスク・センターを自治州のナショナルな体系に間接的に組み込むことで、トランスナショナルに展開するバスク人の制度的ネットワークを構築したのである。

これまでの流れをハイアルディ 2015 に文脈に組み込めば、バスク州政府とバスク・ディアスポラで進行するバスク人コミュニティの再活性化のひとつの装置としてハイアルディ 2015 を位置づけることが可能になるであろう。移民がディアスポラの地で開催する祝祭が、集団内でエスニックなシンボルや感覚を共有することで、コミュニティの結束を強化し、なおかつ故地との紐帯を確認するといった文化的機能を持つということは、従来もよく指摘されてきた。しかしハイアルディ 2015 の場合、そのような象徴的機能に加え、故地のディアスポラ政策と連動している点では故地との紐帯を強化するための制度的役割も強調できよう。そしてそのディアスポラ政策が、故地バスク地方における自治権回復、すなわちネイションとしての復活と連動している点も忘れてはならない。自治州の政治的枠組みの中で故地のナショナリズムが制度化され活性化されるのみでなく、そうしたナショナルな意識が地理的に離れたディアスポラでも共有されることで、エスニックなコミュニティの再活性化が故地バスクとバスク・ディアスポラで同時に進行しているのである。

5. おわりに

19 世紀中ごろから 1970 年代半ばまで続いた移民の時代、バスク地方と世界各地のバスク・ディアスポラのネットワークは、ヒトの移動という行為により結ばれ補強されてきたが、そのネットワーク内の関係は基本的にヒトの個人的関係に基づくものであった。ヒトの移動が途絶えた 1970 年代以降、本来であれば個人相互の関係は希薄になりネットワークは消滅に向かうと考えるのが一般的であろう。しかしその当時からアメリカ西部ではバスク・フェスティバルが盛んになり、アメリカ西部内でのディアスポラ・ネットワークが形成されるようになった。それとほぼ同じ頃、故地バスク地方ではスペイン・バスク地方のバスク州とナバラ州が自治権を回復し、故地のまなざしが世界各地のディアスポラに対して向けられるようになった。

これが偶然か必然かの議論はまた別の機会にするが、完全ではないにしてもネイションとしての復活を果たしたバスク州は、ヒトの移動により構築されたネットワークを頼りに、各地のバスク人のネットワークの制度化を図ってきた。その結果、世界各地のバスク・ディアスポラではエスニシティの再認識とエスニックな連帯の強化が進行してきた。こうして構築された越境するネットワークは、地理的に離れた複数の空間を連動し、越境する空間にあたかも一つの社会空間としての性格を付与するようになった。その空間ではバスク人としての集団意識やナショナルなセンスさえも共有されるようになる。ハイアルディ 2015 の祝祭空間は、このようなバスクのトランスナショナルな社会空間のほんの一部ではあるといえるが、その総体を表象する貴重な祝祭空間なのかもしれない。

トランスナショナルな社会空間を介してナショナルな意識までもが移動するのかという議論が十分できたとはいえない。これは今後さらに検討を重ねるべき課題である。しかしハイ

アルディ 2015 に集う各地のバスク人の熱狂を観るにつけ、昨今のようなグローバル化の時代、エスニックなネットワークが強固であるほどナショナルな感覚のように繊細で価値ある意識が共有に値するのではと思えてならない。

*本稿執筆に際しては、平成 27 年度科研費基盤研究 C (研究代表者：石井久生、課題番号：15K03021) の一部を使用した。現地調査は 2015 年 7 月末から 8 月初めにかけてボイジーにて、同年 9 月にバスク地方にて実施した。ボイジーではハイアルディ 2015 の主催者、バスク博物館・文化センターの皆様、バスク地方ではバスク政府関係者やその他多くの皆様に数々の便宜を払っていただいた。ここに記して御礼申し上げます。

〈註〉

- (1) バスク・ホテルが 19 世紀末以降彼らのコミュニティ活動拠点として機能する様子は、石井 (2015a) にまとめられている。
- (2) 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのバスク人に対する差別について、いくつかの記述がある。例えば Bieter and Bieter (2000: 39) によれば、英語に堪能でなく、孤独な羊飼いとて荒野を移動する彼らは「汚い黒いバスク人 dirty Black Basco」と侮蔑されることがあり、「黒いバスク人 Black Basco」が彼らに対する蔑称として用いられた。Totoricaguena (2004: 126) は、言語や職業だけではなく、当時主流でなかったカトリック信者であったことも差別の原因のひとつであったとして、宗教的要因の介在を指摘している。
- (3) 2014 American Community Survey 1-Year Estimates によれば、バスク人を祖先とする者は全米で 57,594 人であった。
- (4) 特に 1924 年移民法は、南欧や東欧からの移民がまだ少なかった 1890 年に実施されたセンサスの出身国別人口比率をもとに移民割当を適用したため、南欧に分類されるスペインには厳しい割り当てが課され、結果的にスペイン・バスクからの移民は急減した。1921 年移民法では 1910 年センサスの出身国別比率が割り当てられたため、それまでスペインには年間 912 人の入国が割り当てられたものの、1924 年移民法で 131 人まで厳格化された。これによりスペイン・バスクからの移民の入国は急減した。フランスに対する移民割当は厳しくなかったものの、その当時のフランス・バスクからの移民は、牧羊業より酪農業に参入する傾向が強くなり、バスク系羊飼いの労働力不足を補完することはなかったとされる。
- (5) Douglass and Bilbao (1975: 385) によれば、カリフォルニア州チノ、サンフランシスコ、ロスバノス、ネヴァダ州リノ、エルコ、エリー、コロラド州グランドジャンクションなどのバスク・クラブの創設は 1959 年以降である。
- (6) しかし現実には、バスク系住民のローカル・ホスト社会への同化が進行して結束が弱まったことで、それまで開催されてきたバスク・フェスティバルの規模をピクニックに縮小するような例もあるそうである (2014 年 3 月のベーカーズフィールドでの聞き取り調査による)。
- (7) また Douglass and Bilbao (1975: 390) が指摘するように、アイダホ州のビスカヤ系コミュニティとカリフォルニア州・ネヴァダ州のフランス系・ナバラ系コミュニティの分断は、1970 年代の段階ではまだ顕著であった。アイダホ州のバスク系住民はカリフォルニアのフェスティバルに参加することは少なく、同じことがカリフォルニアのバスク系にも言えた。
- (8) NABO 結成は、バスク人にとって世界的に重要な意味を持っていた。バスク人は、ヨーロッパではフランスとスペインの 2 つの国家に分かれて住み、ひとつの国家に帰属することは近年なかった。世界中に移住したバスク人もそれを統括する組織を持つことはなかった。それが 1970 年代の初めに NABO が設立されたことで、アメリカに在住するフランス・バスクとスペイン・バスクの両地域の出身者が、ひとつの組織のもとに集結したことになる。ここにひとつのバスク

が再生されたともいえる。

- (9) この舞踏会はクリスマスの直前にボイジーのバスク・センターにおいて今日でも開催されている。
- (10) 近郊在住のバスク人も多数参加する大規模な祝祭であったが、現在のように大掛かりなバーベキューで調理した肉を販売するような商業的要素はなく、各自食事を持ち寄るスタイルであったようである。
- (11) バスク・ブロック付近の歴史的都心地区では、1950年代ごろから退廃化が進行し、1970年代に入ると再開発が計画されるようになった。再開発のために組織された首都開発社 Capital City Development Corp. は、当初この付近にショッピング・モールの建設を計画していた。しかし個人不動産所有者から既存景観の保存の強い要望が寄せられたため、1980年代半ば以降、行政と個人不動産所有者の協力体制を築きつつ既存景観を保全改修する方針に転換されたことで、バスクのエスニック景観が再生されることになった (Hill 2014: 9)。
- (12) バスク・ブロック再生の歴史は、石井 (2014) にまとめられているが、簡略に要約すれば以下のようなことになる。バスク系住民によるバスク景観保存は、1983年にアデリア・ガロ・シンプロット Adelia Garro Simplot によるウベルアガ・ボーディングハウスの買収から始まった。このバスク・ホテルの建造物は、1864年築のボイジーでも最古のもののひとつに入る。ここはもともとフランス系のジェイコブ夫妻の所有物であったが、1910年にビカンディ・ボーディングハウス Bicandi's Boarding House としてバスク人がホテル業を経営するようになり、1918年からウベルアガ夫妻がホテル経営を引き継いだことでウベルアガ・ボーディングハウスと呼ばれるようになった。同ホテルは1978年まで営業した。その後同ホテルを買収したシンプロットは、1985年にこの建物内にバスク博物館・文化センターを開設した (Zubiri 2006: 381)。同博物館は1993年に西に隣接する現在の位置に移転している。1989年にはボイジー在住のバスク系住民ダン・アンソテギ Dan Ansotegui がバル・ゲルニカ Bar Gernika を開業している。1992年にはシンプロット・オルマチェタ Simplot Hormaechea とリチャード・オルマチェタ Richard Hormaechea が旧アンドゥイサ・ホテルのフロントン (伝統球技ピロタ競技場) の入った建物を取得し、フロントンとして再建した。アンドゥイサ・ホテルは1915年頃開業し1950年に閉業したバスク・ホテルであった。2000年にはバル・ゲルニカの創業者アンソテギが小売り施設のバスク・マーケットを、2005年にはミレン・アルティアック Miren Artiach とホセマリ・アルティアック Jose Mari Artiach がレクオナ・レストラン Leku Ona Restaurant and Hotel を開業している。レクオナ・レストランの場所には、1935年から1943年までベラステギ・ホテル Belastegui Hotel というバスク・ホテルが営業していた。
- (13) 街路景観の整備は首都開発社が担当したが、その立案にはバスク博物館、ボイジー市アート委員会 Boise City Art Commission などが加わった。現在の街路景観は2000年のハイアルディに合わせて完成している (Totoricaguena 2000: 578-9)。
- (14) Yatsko (1997: 66) によれば、旧刑務所跡は石造りの建物や細い通路などがヨーロッパのバスク地方の古い街並みを彷彿させ、この類の行事を開催するのに景観的には理想の場所であった。しかし旧刑務所ということで祝祭開催のための十分なインフラ (例えばオープンスペース、駐車場、7月末の強い日差しを遮る屋根など) が備わっておらず、会場への道路も1本しか存在しないため、来場者にとって極めて不便であった。そのため、1995年から現在の会場 (ただし当時は West Idaho Fairground と呼ばれていた) に変更になった。
- (15) バスク語の joan-etorri はスペイン語の ida y vuelta、すなわち日本語の「往復」を意味する。シンポジウムの英訳は "Going Back & Forth" となっており、バスク人の過去を見つめながら未来へ向かうという意味が込められている。
- (16) 同プログラムは、ネヴァダ大学のバスク・センターとともに、全米を代表するバスク研究機関のひとつである。発端は1974年以降ボイジー州立大学がバスク地方のオニャティにあった旧バ

スク大学に学生を派遣したことから始まるが、2004-5年度以降、正式な学部プログラムとして発足した。同プログラムは外国語学部所属の2名と歴史学部所属の3名のスタッフにより運営されている。同プログラムに所属する歴史学部のジョン・イスルサ John Ysursa (バスケット研究コンソーシアム所長を兼任)、同じく歴史学部のディヴ・ラチオンド Dave Lachiondo (バスケット研究コンソーシアム副所長を兼任)の両氏は、日頃からバスケット博物館やバスケット・センターのホールを利用して幼時から青少年までの幅広い世代にバスケット・ダンスを指導している。さらに彼らは、ハイアルディ 2015の週末土日にエクスポ・アイダホで開催された舞踏上演会でもボーイズの複数のチームのコーディネイトを担当した。彼らはいかなればボーイズのバスケット系住民コミュニティを組織化するうえでのキーパーソンでもある。

- (17) これまで7回あったハイアルディ開催年で、ボーイズが年次総会会場とならなかったのは、2005年(会場: Rock Springs, WY)と1995年(会場: Buffalo, WY)の2回のみである。
- (18) 主催者によれば、聖イグナチオのミサやバスケット・ブロックにおけるBasque-ingのようなオープン参加型の行事が含まれるため、総参加者の正確な把握は難しいとのことである。ただし地元紙Idaho StatesmanのHPに掲載された2015年8月3日付の記事によれば、週末土日のExpo IdahoでのBasque-ingの来訪者が2万人以上、木曜のセンチュリーアリーナでのSports Nightの観客が約5千人、金曜のモリソン・センターでのFesta'raの観客が約2千人ということなので、総数で約3万人というのは妥当な数字であろう。
- (19) 2015年9月8日のバスケット州政府首相府ベナン・オレギ Benan Oregi氏へのインタビュー調査による。数字の幅が大きいのは、政府ルートや旅行代理店のツアーなどを利用した来訪者の数は正確に把握可能であるものの、親類や友人などの個人的関係を頼りにした参加者のほうが多数であったため、それらについては把握が困難であるという理由による。
- (20) 上記と同様にオレギ氏へのインタビュー調査によれば、バスケット州政府からは首相を含め20人がハイアルディ 2015実行委員会の招待を受け開会式やシンポジウムなど各種行事に出席した。パフォーマー約100人については、その選考はハイアルディ 2015実行委員会が2年前に実施した公募で参加する個人や団体が決定された。政府関係者やパフォーマーの滞在費はボーイズのハイアルディ 2015実行委員会が支出したが、旅費はバスケット州政府が支出した。総額約6万ユーロであった。
- (21) 具体的には1994年5月27日成立の1994年州法8号である。同法はバスケット地方外に居住するバスケット人を組織化する拠点にバスケット・センターを位置づけ、バスケット・センターに対し制度的支援を推進することを目的に制定された。

参考文献

- Amin, Ash, 2004. "Regions Unbound: Towards a New Politics of Place," *Geografiska Annaler*, Series B, Human Geography, 86(1): 33-44.
- Bieter, John and Mark Bieter, 2000. *An Enduring Legacy: The Story of Basques in Idaho*. University of Nevada Press.
- Bieter, John, John Ysursa and Dave Lachiondo, eds., 2014. *Becoming Basque: Ethnic Heritage on Boise's Grove Street*. Investigate Boise Community Research Series, vol. 6, Boise State University.
- Douglass, Williams A., 1996. "Basque-American Identity: Past Perspectives and Future Prospects," In Stephen Tchudi (ed.), *Change in the American West: Exploring the Human Dimension*. University of Nevada Press, pp. 183-199.
- Douglass, William A. and Jon Bilbao, 1975. *Amerikanuak: Basques in the New World*. University of Nevada Press.
- Gans, Herbert J., 1979. "Symbolic Ethnicity: The Future of Ethnic Groups and Cultures in

- America," *Ethnic and Racial Studies*, 2(1): 1-20.
- Hill, Gretchen, 2014. "Production of Heritage: The Basque Block in Boise, Idaho," *Basque Studies Consortium Journal*, 1(2): 1-22.
- McClinchey, Kelley A. and Barbara A. Carmichael, 2014. "The Future of Local Community Festivals and Meanings of Place in an Increasingly Mobile World," In Ian Yeoman, Martin Robertson, Una McMahon-Beattie, Karen A. Smith and Elisa Backer (eds.), *The Future of Events & Festivals*. Routledge, pp. 140-156.
- Smith, Anthony D., 1998. *Nationalism and Modernism: A Critical Survey of Recent Theories of Nations and Nationalism*. Routledge.
- Szymańska-Matusiewicz, Grażyna, 2015. "The Two Tét Festivals: Transnational Connections and Internal Diversity of the Vietnamese Community in Poland," *Central and Eastern European Migration Review*, 4(1): 53-65.
- Toticaguena, Gloria Pilar, 2000. "Celebrating Basque Diasporic Identity in Ethnic Festivals: Anatomy of a Basque Community: Boise (Idaho)," *Revista Internacional de Estudios Vascos*, 45(2): 569-598.
- Toticaguena, Gloria Pilar, 2002. *Boise Basques: Dreamers and Doers*. Coleccion Urazandi Bilduma 3, Servicio Central del Gobierno Vasco.
- Toticaguena, Gloria Pilar, 2004. *Identity, Culture, and Politics in the Basque Diaspora*. University of Nevada.
- Toticaguena, Gloria Pilar, 2005. *Basque Diaspora: Migration and Transnational Identity*. Center for Basque Studies, University of Nevada.
- Van Esterik, Penny, 1982. "Celebrating Ethnicity: Ethnic Flavor in an Urban Festival," *Ethnic Groups*, 4(4): 207-228.
- Yatsko, Michael S., 1997. "Ethnicity in Festival Landscapes: An Analysis of the Landscape of Jaialdi '95 as a Spatial Expression of Basque Ethnicity," Master's thesis, Virginia Polytechnic Institute and State University.
- Zubiri, Nancy, 2006. *A Travel Guide to Basque America: Families, Feasts, and Festivals*. 2nd edition, University of Nevada Press.
- 石井久生, 2014. 「バスク系羊飼いによるバスク地方とアメリカ合衆国西部間の移住行動 — ナバラ州バスタンの羊飼いの事例」『共立国際研究』31: 37-61.
- 石井久生, 2015a. 「バスク・ホテルにみるバスクのトランスナショナル社会空間 — ボイジーとベークースフィールドの事例」『共立国際研究』32: 43-70.
- 石井久生, 2015b. 「バスク人が生産する祝祭空間のトランスナショナルリティ — アメリカ西部アイダホ州ボイジーのハイアルディの事例」『日本地理学会発表要旨集』2015年度日本地理学会秋季学術大会: 319.

Transnationality of Basque Festival Space in the Case of Jaialdi 2015, Boise, Idaho

Hisao Ishii

Jaialdi is the most important ethnic festival for Basque diaspora in the world, celebrated in Boise, Idaho. *Jaialdi 2015* was held in the last week of July, 2015, at the multiple locations in Boise. The main site was the Basque Block. This is just a block on the Grove Street, but an important memorial place for the Basque people, because of the existence of ex-boarding houses, handball court *piloteak*, the Basque Museum and Cultural Center, and especially the Basque Center *Euskaldunak*. This is a core place for community activity of the Basque people in Boise. In the period of *Jaialdi 2015*, a lot of Basque people living not only in the American West but also in the American Continents got together at this place, and they reconfirmed intensive and wide spread network among them. In this point, it can be said that *Jaialdi* operates itself as an instrument to reinforce their network. But this is not only the matter of the network of Basque Diasporas. In the case of *Jaialdi 2015*, about one tenth of visitors came from the Basque Country. The place of origin of immigrants still maintains strong relation with the festival space in Boise. The geographical origin of the Basque people and their worldwide diaspora function just like a transnational social space linking tightly the both of them.